

鑑賞の手引

井村彦次郎商店 カップ&ソーサー

磁器／明治時代中期～後期(19世紀末～20世紀初頭)／田邊哲人コレクション



■時代背景

1859年に開港して以降、横浜は東西交流の玄関口となりました。海外からさまざまな西洋の品が輸入され、西洋の文化も入ってきました。また、日本の美術品や工芸品は、その精巧な作りや異国的な絵柄で、西洋の人々に人気があり、横浜港から、たくさんの陶磁器や漆器が輸出されました。外国人の注文に応じて制作し、港も近く輸送に便利だったため、横浜には輸出用工芸品を製作する工房や販売する店がたくさんありました。横浜の輸出陶磁器は、宮川香山の「真葛焼(まくずやき)」が有名ですが、そのほかにも「横浜焼」、「ハマ焼」と呼ばれる陶磁器を製造する工房が多数ありました。井村彦次郎商店はそのなかでも大手の工房でした。

■作品について

これは、紅茶やコーヒーを飲むときに使うカップ・アンド・ソーサー(受け皿付きの茶碗)で、西洋人から注文を受け、輸出用に作られた洋食器です。生地が絵付けの柄が透けて見えるほど薄く、鮮やかな色彩で、菊の花が繊細に描かれています。

■鑑賞のポイント

1. 日本の伝統的な茶碗は、持ち手も受け皿もありません。明治時代になって初めて作られた洋食器であるにもかかわらず、洗練された形と装飾で上質な品に仕上げられています。表の絵付けが透けるほど薄い生地や、美しい色使いで描かれた菊の花の繊細な描写に注目してください。これらを見た西洋の人たちはどんな感想をもったのでしょうか。当時の日本の職人たちは、どんな気持ちでこれを作ったのでしょうか。想像してみてください。

2. 菊は、日本を象徴する花として海外で人気が高く、輸出用の工芸品やドレスの装飾に用いられました。本展の第3章には、日本の影響を受けた西洋のドレスや工芸品が展示されていますが、それらの中にも菊の柄を取り入れた作品が数多くあります。どこに菊が用いられているのか、探してみてください。そして、どのように取り入れられているのか、よく観察してください。菊の図柄のドレスを着た西洋の女性たちは、どんな気持ちだったのでしょうか。想像してみてください。